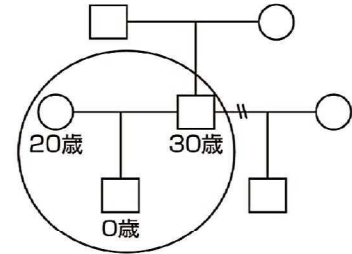


DV家庭で育った両親の子育てへの見守り訪問

母親が20歳のとき、妊娠27週で出生体重一〇〇〇グラムの第1子を出産し、未熟児養育医療の申請と病院からのハイリスク支援依頼で、ハイリスク家庭として支援を開始した。

生活保護の世帯で両親どちらも無職でありDV家庭で育った過去があった。父親は前妻へのDVが理由で離婚した経緯があり、父親にとっては二人目の子どもで、前妻との間に生まれた子どもは、父親の実母がみている状況だった。また、父親は精神科に通院しており、定職にはついていないが、アルバイトをして収入を得ていた。



母親自身にとっては初めての子育てで、母親方の親族や支援者もいなかったもので、第1子が3カ月になるまでは、保健所の訪問を月2～3回行っていた。そんな矢先、第1子が3ヶ月のときに家で腕を骨折した。その際、「何かのときに落ちた。」「布団から落ちた。」と父親は言っており、不自然さがみられたため警察が関わったが、虐待とははっきりと言えない形で終わった。その後、病院や児童相談所などの関係者会議が行われ、虐待の疑いがある『要注意な家』なので定期的に見守るという形になり、保健所、児童相談所、市役所の生活保護ワーカー、家庭児童相談員が交代で訪問していった。児童相談所に対しては訪問を拒否していたが、児童相談所の役割として経過を見るという形で訪問を行っていた。

お父さん自身は、とても子どもを溺愛して。私が見る限りではまあ、手を出すことはないとは思いますが。暴言はある。暴言っていうか、言葉のすごいあれはあるんですよ。荒い口調で。

第1子は未熟児なので乳児期までは病院で健診を受診していた。また、体重も身長も順調に成長していたので、父親は「予防接種を受ける時に医者にみせているから、なんで今さら見せるか。」と言って、市の1歳6ヶ月児健診、3歳児健診に対して拒否していた。しかし保健師から「歯のものとかが、そういう部分は無料でできるから連れていったらいいよ。」と促すことによって、母親が健診へ連れて行っていた。母親が健診会場で待つ間、外で待っている父親から母親へ「早くやれ。」と電話が何回もかかってきて、母親は困りながらも「早めにやってください。」とスタッフへ言っておどおどしながら健診を受けていた。父親は、母親の行動を拘束するように、母親の行動を逐一電話で確認していた。

何ていうかね、そのお家のお母さんをお父さんが支配しているとか、妻への言葉のDVとかがあって、健診を受けにいったらお家のことをいろいろ聞かれるから。そういう部分では、お父さんがあんまり。別に健康だから。健診とか、市の何かこう、相談する人たちのところには行かないという、お父さんの考えですね。

保健師は第1子が生後半年までは月2回、半年以降1歳までは月に1回訪問に行っていた。第1子が1

歳以降は健診や生活保護課のワーカーが訪問して経過を見ながら、父親は生活保護費のことは保護課に相談して、母親が困った時には保健師に相談があって、保健師は主に電話で母親とコンタクトをとっていた。

彼女（母親）も、こっちへ電話をかけてくる時には、お父さんがいない時にしかかけなくて、こっちからかけた時に、ニュアンスでわかるさ。「今、話できるね？」って聞いて「今〇〇〇してまーす」って言ったら、ああお父さんがいるんだとか。お父さんがいない時だったら本音が聞けるさーね。お父さんがいる時に聞きたいこともあるけど、お母さん自身だけのね、話も聞きたい時もあるから、そんな時に役場で待ち合わせしようかなと思ったけど、やっぱり行動チェックするから、その後、お母さんが何か言われても困るなと思って。

1歳半過ぎて1歳半健診以降は、第1子に発達面での遅れがとて目立ってきたので、家よりは集団保育がいいと、この間保健師から継続的に勧めてやっと保育所に入所した。母親は父親からの言葉の暴力に耐えている部分があったので、母親がもう少し自立していけるのではないかと考えた。そこで、第1子が保育園に入っている間に保健師から母親の方に、自分でできる範囲の自立としてパート的な仕事をしたらどうかと勧めていた。そして、母親と一緒に約半年仕事の調整をしていたが、第2子を妊娠したので仕事を始めることは結局できなくなってしまった。ちょうどその頃、第1子は保育園で他児から水疱がうつって1週間入院したため、父親が半年で保育園を辞めさせていた。

第1子が1歳10ヶ月の頃に保健師が訪問した時、アパートの部屋の中の掃除がとて行き届いており、古い家ではあったが非常に綺麗だった。父親が几帳面で食べ物のカスでも落とそうものなら、すぐ拭くといった感じだったので、おもちゃも見当たらずとてピカピカしていた。また、父親は人が入ってきて、指導されるのが嫌だったようで、こどもを見るために入ったとしても、家の環境は変わらなくても、誰かが入ること自体を嫌がっていた。潔癖というか、自分の範疇は、自分のやり方で母親に「ここがなってない。」と言って、指示して掃除もしていたようだった。

第1子とはとにかく人懐こかった。発達障害の部分もあるかもしれなかったが、保健師が行くととて喜び、「遊んで、遊んで」と母親との話を全くさせないぐらいだった。保育園を辞めてからは家にいたので外にいつも出たがっていた。その時点で、第1子は2歳を過ぎていたので、お父さんへ「こんなして。大人と遊ぶよりは、こども同士で会話をしたほうが、言葉もいっぱい覚えるし、いろんな面で外遊びとかも必要だよ。」と言うと、「時々、公園連れてっているよ」と言っていた。しかし、訪問に行く度に第1子はテレビを見ていた。

その後、第2子の出産もあり、保健師は継続して育児支援・相談相手として母親を支え、現在も見守りの形で支援を続けている。

感想：DV家庭で虐待があるかどうかの判断が難しいながらも、継続的に関わっていくことの大切さを学んだ。母親の電話のニュアンスを感じ取って、母親にとって本音を言うことができる状況かを察している部分が保健師としての気遣いを感じた。また、保健師は母親の良き相談相手としてだけではなく、DVの父親に対し、ときには子育てへの声かけを行ったり、必要なときには父親を説得したりするところなどが参考になった。

（外間）